

論壇：活字メディアが伝える中国バレーボール・II

—ワールドカップ'99の報道から—

矢島 忠明*, 河野貴美子**

緒 言

中華人民共和国は1999年、建国50周年を迎え、国慶節には華やかな祝賀パレードが行われた。パレードには多くの英雄的スポーツ選手も参加したが、バレーボール界からは陳招娣といったかつての名選手に加え、現女子チームのエース孫玥の姿もあった。その日彼女は、国民の大きな期待に答え、再び世界の王座を奪回するべく、ワールドカップ'99、そして2000年シドニー五輪へ全力で臨みたいと抱負を述べている(99/10/8『北京晩報』)。

1999年11月2日から12月2日まで、日本でワールドカップバレーボール男女大会が開催された。第3位までのチームにシドニー五輪の出場権が与えられる今大会には、男女それぞれ12チームが参加し覇を競い、中国も女子が目標3位、男子はベスト8を目指して参加した。そこで今回われわれは、1998年の世界選手権大会に続き、中国の新聞報道に注目し、活字メディアがバレーボールをいかに伝えているかを紹介し、シドニー五輪に向けての中国バレーボールの状況、新ルールに対する反響等を中心に報告してみたい。

1. 主力選手を欠く苦しい大会～女子～

中国女子は今大会、リベロの李艶、最年少で最高身長センター趙蕊蕊(17才、197cm)を怪我で欠き劣勢を強いられた。趙蕊蕊は練習中の膝の怪我であるが、李艶の方は休暇中に交通事故で右手尺骨を骨折、中国バレーボール協会から報告書の提出と罰金という厳しい処罰を科せられるものであった(99/10/10『北京晩報』)。リベロのポジションはセッター対角の周蘇紅が務めたが、エースの孫玥と殷茵も怪我から復帰したばかりで、チーム事情は厳しかった(99/10/15『北京晩報』)。加えてチームの平均年齢が22才という若さへの不安は、現実のものとなり中国チームに重くのしかかることになる。胡進監督はしかし大会前、中国の伝統的な持ち味である「速さと変化による戦術」であくまで3位以内に入り、五輪の出場権を獲得することを目標と発表した(99/10/24, 99/10/27, 99/10/29『北京晩報』)。

今大会で採用された新ルールについては、中国バレーボール運動管理センターの主任徐利氏が、試合展開の予測

がますます難しくなるとコメントを発表した。また徐利氏は、サーブのネットインを認めることでサーブはますます大胆かつ攻撃的になり、サーブレシーブの難度が増すこと、タイムアウトの減少によりゲームのリズムが速くなり監督の指揮がますます難しくなることなどを指摘している(99/10/15『北京晩報』)。新ルールについては胡進監督もチーム間の差を縮め、試合展開を激しくするものとの認識のもとで迎えた大会であった(99/10/24『北京晩報』)。

中国は初戦のペルーを3対1で下すが、第2戦のキューバには1対3で敗れた。キューバ戦については特に25:27で惜しくも落とした1セット目において、勝機はあったが大事な場面でチームの若さがミスと呼び、自らチャンスを逃してしまったと評された(99/11/4『北京晩報』)。しかしこの時点では、奪ったセットから今後の教訓を見だし実戦の中で力を伸ばせという希望的記事が載った(99/11/4『北京晩報』)。中国はその後チュニジアにはストレートで勝つものの、ブラジルには1対3で敗れ、メディアの論調は厳しくなる。

99/11/9『北京晩報』は、ブラジルに負けた後、胡進監督の更迭を求める世論も中国国内にあるとした上で、ある専門家の見方として、監督の問題よりも選手の技術が「粗い」ことが問題、との記事を載せた。それによると、キューバ戦やブラジル戦で終盤のリードを守りきれなかったことに、若さや強打不足を指摘する声があるが、実はこれは技術の細かさや磨きが足りないために精神的不安を呼び起こした結果だとしている。そして中国の特長である速さと変化のある速攻を發揮するためには、それに至るまでのブロックと守備のコンビネーション、レシーブ、パスといった全面的な技術の細かさや積極的な戦術がなければならないが、これがないために重要な局面でミスが出てしまったのだとしている。

また99/11/8『北京晩報』は、クロアチア戦後の記者会見で胡進監督が「中国にもバーバラ・イエリッチのような大砲が欲しい」と発言したことをコラム記事とし、これまで一貫して「速さと変化」を戦略としてきた監督のこの発言は、監督の迷いと行き詰まりを表すものとしている。記事によると胡進監督は、現在世界のバレーボールは欧米型の強打のバレーを中心に発展しており、中国が今まで追求してきた速さと変化のみでは勝つことができないと述べたとする。続いて記事は胡進監督がチームを編成する際、「速攻重視」と言いながら実は技術は少々粗くとも高さや力のある選手を集めたことを指摘し、さらに、新ルールによ

*早稲田大学

**東京都立晴海総合高等学校

てサーブが威力を増し、サーブレシーブからの速攻が困難になったことをあげながらも、とりあえず現時点では「速さ」を持ち味として戦っていくしかないという胡進監督の言葉で結んでいる。

中国はクロアチア、アメリカにストレート勝ちし、韓国も3対1で下す。同じアジアのライバルを下し、翌12日には多くの記事が並んだが、その中には北京晩報特約評論員の李安格氏のコラムもあった。

【99/11/12「北京晩報」「喜びあり心配あり」】

中国、日本、韓国の3国が共に4勝2敗で並んでいる今、この中韓戦は3位以内に入るチャンスをつかむための鍵であった。中国女子チームは3セット目の惨敗をその後は引きずらず、4セット目を奪い、勝ちを取めた。

しかしこの試合は技術を統計的に分析すると楽観視できるものではない。速攻による得点は双方共に34点であったが、高さにおいては中国が有利であるにも関わらず、強打による得点が6点少なかった。今後高さに勝るロシアやイタリアとの戦いにおいては、強打の差はさらに広がるであろう。韓国戦では主にブロック(7点)とサーブ(5点)で上回った。が、これも今後ブロック力、サーブ力に上回るヨーロッパの強豪チームとの試合では難しくなるであろう。

韓国戦において中国の速攻は安定しており、良い効果をあげた。速攻による得点はスパイクによる総得点の58.6%であった。これは韓国のサーブに威力が無く、4セット中韓国のサービスエースは2点に止まったため、我々のサーブレシーブを楽にし、十分に速攻を発揮できたからである。しかし強力なサーブでコンビを乱され、高いブロックで攻撃を阻まれるようになると、形勢は楽観できない。例えばキューバ戦では1セット平均3点のブロックポイントを取られたのに比べ、韓国のブロックポイントは1セット平均1点であったのである。試合全体を見ると、胡進監督率いるこの若いチームは確かに、速さと変化を戦術とする監督の考えるバレーを一貫して目指し努力している。呉咏梅、陳静、李珊の3人のセンタープレーヤーのクイックやブロード攻撃は十分積極的に生かされ、邱愛華のダブルクイック等の速攻への絡みも効果的である。そして孫玥と王麗娜のレフトの平行やセンターへ切り込んでのスパイク等は、多彩な変化のある速攻を形成している。コート上の5人の選手が皆速攻に参加する戦術はもちろん間違ったものではない。ただし速攻は絶えず新しい変化を作っていかなければならず、さもなければ体格、体力面で優れた欧米との戦いにおいては、11年ぶりの世界王座の奪回も現実のものとはならないであろう。

中国はこの後アルゼンチンに勝ち、3位以内の座をかけて残りのロシア、日本、イタリア戦に臨んだ。しかしロシアには1対3、日本にはストレートで敗れ、イタリアとの最終戦には3対1で勝ったものの、目標の3位には手が届か

ず結局5位という成績に終わった。新聞報道においては特に日本戦を批判的に注目する記事が多かったが、敗戦の原因として胡進監督は、若さと、日本にとって「ホームゲーム」であり、その応援に心理的圧力を強く受けたことをあげた(99/11/16「人民日報」「北京晩報」)。それに対して99/11/16「北京晩報」は、若さ自体は罪ではないが、敗戦の口実を若さとするはよくない。12名のメンバーは全国各地から選りすぐられた選手なのであるから、若さを敗戦の理由にあげることはできない、としている。

そして中国女子チームが帰国した後の「北京晩報」には、以下のコラム記事が載った。

【99/11/19「北京晩報」「専門家が評する中国女子バレー」】

- 順位と実力は基本的に相応
- 「弱さ」にファンは「がっかり」
- 五輪の出場権は必須
- 未発掘の潜在力は大

中国女子バレーチームは本大会において5位という結果であったが、これは現在の中国女子の本当の実力を表すものであろうか。中国バレーボール界の専門家たちはこれについて以下のように考えている。すなわち、中国チームは基本的に自分たちの力を発揮していたが、同時に多くの問題点も顕れてしまった。今後はこうした問題点を解決し、また、選手の選考と戦術においていくらかの改善をしていかなければならない。専門家間で一致しているのは、中国女子バレーにはまだまだ潜在力が隠されており、それらを有効に活かせれば、シドニー五輪への出場はもちろん、五輪においても好成績を収められるであろう、ということである。

今回のワールドカップにおいて中国女子は11戦7勝4敗で、負け試合は日本戦を予想外に落としてしまった他は、実力で中国を上回るキューバ、ブラジル、ロシアに敗れたものであるが、これら3チームとの試合でも勝機はあった。ある中国バレーボール協会幹部の言葉を借りれば、この試合結果は実力を反映している、ということになる。

胡進監督は今年4月28日に中国女子バレーチームを率い始めて以来、招待試合やワールドグランプリ等で好成績を収め、アジア選手権大会では優勝を果たしている。しかし本ワールドカップにおいて胡進監督は指導方針を一部改革し、例えば大胆に新人選手を起用するなどしてチームの大型化を図り、高さや速さを組み合わせた攻撃という戦法を展開した。センターの李珊はワールドカップ初出場であったが、試合中なかなか効果的な速攻を見せていた。また、新人陳静の速攻も当たっていた。急速「リベロ」として起用された周蘇紅の守りも合格点に達しており、邱愛華と諸韻穎のコンビも磨きがかかり、若い選手たちにとっては良い経験となる大会であった。

しかしいかんせん新人が多く、しかもほとんどがワールドカップという大きな試合は初めての体験で

あったため、実際の試合では多くの課題が噴出した。例えばそれが最も顕著に出たのは日本戦である。チームは全く浮き足立ち、未熟さを露呈してしまった。

また中国のそうした弱さは、キューバ、ブラジル、ロシア戦においても見られた。(中略)中国チームの勝利はすべて先にリードを奪った時のものであり、後から「逆転」する力にはまだまだ不足しているのである。

中国チームのこうした弱さの原因はやはり自分たちのプレーの「粗さ」にある。速攻や移動攻撃を行っていても、それがまだまだ有効に発揮できていないのである。中国チームの攻撃の変化も、見破られていることがあり、中国のリズムを把握されてしまうと速攻は封じられる。呉咏梅の攻撃がワールドカップの後半戦で全く相手に押さえられてしまったのはその良い例である。中国はバックアタックのバリエーションに欠け、バックライトからの攻撃が多く、バックセンターやバックレフトからの攻撃は少ない。

ある専門家は、監督スタッフの問題点も指摘している。すなわち、「日本との試合を重視すると口では言っているが、実際の試合を見ると気持ちの準備が不十分であったようだ。特にブロックと守備の問題はひどく、高さで大きく勝る我々が日本を止められなかったのである。以前の中国女子チームの平均身長はわずか177cmであったが、それでどうしてロシアチームの強打をブロックできたのであろうか。相手のサーブの威力はさほどでもないのに、我々はどのようにそれをレシーブできないのか。これは普段の練習が不足しているのではないか。大型化とは相対的な概念であって、試合中に重要なのはブロックの高さではなく効率的なブロックなのである。」

国内リーグのある監督は次のように語っている。「ただ単に大型化するべきではない。いくら大型化を図ったところで、ロシアを超えることはできない。やはり従来の『全面的な速さと変化』という戦法でいくのがよいのではないだろうか。日本もかつて大型化の道を歩き始めたが、後に再び速さと変化の路線へと戻した。重要なのはやはり、試合中の守りとそこから反撃なのである。」また別の専門家はこのように反論している。「今はレシーブと切り返しのどちらが重要かといったことを考えるときではない。中国は世界のバレーボールの動向は簡単かつ実用的なものであることをはっきりと認識すべきなのである。それは例えばロシアを典型とするような、センターの高さを中心として両サイドに攻撃の幅を広げ、レシーブが上がったらバックから攻撃をする、という明快なリズムである。もちろんこれだけをやればよいのではなく、こうした基本プレーの上に、多彩なコンビネーションを駆使しながら可能性を見いだすべきである。」

新ルールにおいては、ミスを少なくすることが必要である。試合中のミスの多さは練習の質の問題点を示している。

もちろん3位という目標に届かなかったのは、確かに李艷と趙蕊蕊の欠場の影響もあったろう。とりわけ胡進監督は197cmの趙蕊蕊を中心に戦術を練ってい

たのである。

今回これらの問題が表面化したのはかえって良いことである。問題は表面化してこそ解決されるのである。今回中国はシドニーへの切符を手に入れることはできなかったが、現在の實力からすれば予選(2000.6於東京)を勝ち抜くことは難しくないだろう。

中国女子バレーは伝統であるオールラウンドで緻密なプレーを守っていかなければならない。かつてのチームが成功したのはチーム全体のコンビネーションによってであり、決して郎平の強打のみによるものではない。その「鉄のエース」でさえ世界最強のエーススパイカーではなかったのである。中国チームはかつてのように、多彩な攻撃方法を行っていくべきである。今後のバレーボールは攻撃重視となり、日本や韓国のように守りをいくら固めても世界のチャンピオンにはなれない。中国チームは今後、速攻を磨くと同時に、前衛および後衛からの変化のある攻撃を強化し、速攻のコンビの上「決定打」を加え、合わせてブロックの効率とサーブの質を高めていかなければならない。

国内のある専門家はまた次のように言っている。「選手の素質は非常に高い。その潜在力をもってすれば技術も戦術も完璧に洗練されていくはずであり、それらをコンビネーションで組み合わせれば必ず最高のチームになりうる。まして今回は殷茵も怪我で出場機会が少なく、主力の李艷と趙蕊蕊を欠いていたのが大きく影響している。」

すなわち、若い中国女子チームにとって今回のワールドカップはチームを鍛える良い機会であったのである。課題が明らかになったと同時に、強豪チームとの試合を通じて自信もつけた。胡進監督が掲げる「全面的な速さと変化」のバレーは中国チームに最も適した戦術であり、高さや速さの組み合わせというものは世界の潮流である。中国女子チームが今後、実践における技術を緻密に磨き、全体的なコンビを高めていくなれば、かつての中国女子のように、どのポジションにおいても穴のないバレーを作り、世界のバレーボール界に新たに覇を唱え、シドニー五輪で結果を出すことであろう。

2. さらなる闘志を前面に～男子～

1998年のアジア選手権では優勝を果たしたものの、中国男子チームは世界のトップレベルとは水をあけられている。汪嘉偉監督自身、「練習も積み、状態も悪くはないが、試合になると同じミスはまだ繰り返してしまい、個人の能力とチーム全体のコンビネーションがうまくかみ合っていない。高さも経験もあるチームだが、技術の全面性と選手の主体的思考に欠ける(99/11/2『北京晩報』)」との不安をかかえての参加となった。大会前、汪嘉偉監督は目標をベスト8に置き、特に韓国戦、日本戦は是非とも取り、その経験と自信を12月に行われる五輪アジア地区予選につなげたいとしたが(99/11/12『北京晩報』)、結果は非常に厳

しいものとなった。

ワールドカップ男子大会は11月18日に開幕、中国は初戦のロシア、続くブラジル戦を落とし、第3戦もアメリカに敗れた。試合前からこの開幕3戦は格上の相手で勝利は難しいとしていたが、とは言っても、その戦いぶりに覇気が感じられないとの指摘は、大会最後まで中国男子にとって深刻な課題となった。汪嘉偉監督の言葉によると、「力の勝る相手との試合を簡単にあきらめ、気持ちで負けてしまっている(99/11/19『北京晩報』)」ということである。汪監督はまた、新ルールはアジアの男子バレーボールの発展を阻むものであるとして、国際バレーボール連盟に対する不満をメディアを通じて機会あるごとに表明した。すなわち、世界の男子バレーの競争力を上げるため、アジアのチームは連盟の助けを得るべきであるのに、新ルール、特にサーブのネットインを有効とすることは力に勝る欧米に有利な措置であり、かえって「弱きを殺し強きを助ける」ものである。アジアのバレーが落ち込むことは世界のバレーの発展にも影響するものである、との主張である(99/11/20『北京晩報』)。これに対し連盟のルール委員会委員長は、サーブのネットインは現在試行の段階であり、正式には2000年8月の国際バレーボール連盟代表大会で採否を決定するとコメントを発表した(99/11/24『北京晩報』)。

さて中国は、チュニジアを下すが、その後はイタリアには1対3、キューバ、そして日本にはストレートで敗れる。その間、新聞メディアは精神面、技術面等さまざまに中国チームの課題を指摘するが、スペインに2対3、また韓国にもストレート負けを喫し、心理的な問題が強調されるようになる。続くカナダ戦は2対3、アルゼンチン戦も1対3で敗れ、最終的に1勝10敗の11位という結果に終わる。大会終了後の12月3日『北京晩報』の記事は、中国男子の戦いを以下のように総括している。

【99/12/3『北京晩報』「中国男子 闘志をもってこそ五輪への道は開ける」】

ワールドカップ'99男子大会は昨日東京で閉幕し、中国男子はベスト8という目標の達成はおろか日本と韓国にも敗れ、五輪アジア地区予選(1999.12於上海)に向けて先手を打つこともできなかった。しかし大会を通じて選手たちは、強い闘志をもって臨まなければシドニーへの道は開かれないことをはっきり感じたことであろう。

大会前、中国チームのスタッフから選手に至るまで皆、参加11カ国を「勝てない相手」「何とかして勝ちたい相手」「勝たなければならない相手」という3つのレベルに分けて考えていた。理論的に細かく考えていくことはもちろん必要であるが、しかし彼等は、試合は頭で考え出すものではなく実際に戦って結果を出すものだというのを忘れてしまったかのようであった。中国バレーボール協会会長の袁偉民氏は中国チー

ムのワールドカップ壮行会の席上で、3位に入るのは難しいことではあるが、世界の強豪と戦うときには「恐れずに勝ちにいこう」という決意と闘志が必要であると繰り返し述べた。しかし男子チームにはそれが全く見られなかった。

中国が初戦でロシアにストレートで敗れた後、汪嘉偉監督は実力の不足よりも、気持ちで相手に圧倒されたということを強調した。その後ブラジルにストレート、アメリカに1対3で敗れ、チュニジアには3対1で勝つが、この4戦は基本的に予想通りの展開であった。しかし問題は第5戦のイタリアとの試合で起こった。イタリアは前回のワールドカップの優勝国であるが、今回は状態が良くなく、中国は1セット目を25対23で奪った。しかし勝機が生じたその時、選手たちはまるで勝利への準備をしていなかったかのように力を発揮できず、結局1対3で敗れてしまった。試合後汪嘉偉監督は絶好のチャンスをつかめなかったのは本当に残念と、複雑な気持を述べた。イタリアは大会前は「勝てない相手」に数えられていたが、調子は悪く、我々は強豪を下す絶好の機会を自分から放棄してしまったのである。中国チームにとって最も悔やむべきことは、強豪に敗れたことよりも、強豪との戦いにおいて闘志や自信を発揮できなかったことである。

ワールドカップは第6戦に至って、波乱が起こる。どうしても氣勢の上がらぬ中国はキューバの勢いを止められなかったが、一方カナダは強豪ブラジルをフルセットで下し、日本もアメリカをもう少しの所まで追いつめ、またさらに驚くべきことに韓国が頑強な闘志をもって高さとパワーを備えたロシアをフルセットで下したのである。客観的には、韓国は高さにせよ強打にせよ中国には及ばないが、ではなぜロシアを下すことができたのであろうか。それは守りからの切り返しと、最後まであきらめない鉄の意志によるものである。日本との試合で中国は、全く闘志と呼べるものもなくストレートで惨敗した。特に3セット目は20:15とリードしていながら逆転された。観衆の影響を受けたというのであれば、韓国が日本に勝ったことをどう説明するのであろうか。日本戦の後汪嘉偉監督は、「今日我々は気持ちの面で日本に敗れた。闘志に欠け、戦術を発揮できなかった。これはチームと私個人にとっての教訓である。」と語った。韓国にストレートで敗れた時に、これまで中国と数多く戦ってきた韓国チームキャプテンの金世鎮は、「中国チームの状態はとても悪く、以前と比べるとまるで別のチームのようだ」と語った。

12月27～29日に、シドニー五輪男子バレーボールアジア地区予選が中国上海で行われ、中国は日本、台湾、韓国を迎え戦うが、果たして五輪への出場は可能なのであろうか。今回のワールドカップを通じて若い選手たちは成長を続け、中でも陳方の出来は素晴らしく、彼のジャンプサーブと強打は中国の未来への希望と言える。また陳琦と王進も合格点のプレーを見せ、セッター王賀兵も伸びている。セッター対角盧衛中も

安定しており、攻撃的なサーブは中国の有力な得点源である。しかし日本、韓国の進歩も早い。中、日、韓の3チームはいずれも速攻と変化を特長とするため、サーブレシーブの成功率が重要であり、中国はわずかにブロックで優勢なだけである。

客観的にはアジア地区予選はどのチームにも均等なチャンスがある。予選では日本も韓国もさらに厳しい戦いをしなくてはならないであろうし、中国の五輪出場への道は確かに険しい。五輪出場は予選本番で力が発揮できるかどうかにかかっている。

アジア地区予選は、実際には日本戦、韓国戦の2つが鍵である。予選までの短い時間の中で戦術や選手起用を変更するのは現実には難しい。何も隠すものがないのであれば、我々はとにかく最後まで全力を尽くし、1点もおろそかにしてはならない。そうすれば、試合のキーポイントであきらめなかった方が、最後に笑うということになるのである。1998年に18年ぶりにアジアの王座を奪回したのは、頑強な闘志によるものであったことを忘れてはならない。各チームの力の差が接近している現在、中国男子は昂然たる闘志をもって戦ってこそ、シドニーへの切符を手に入れることができるのであろう。

結 語

2000年のシドニー五輪に向けて、中国の新聞メディアにはしばしば国家体育総局副局長の袁偉民氏の談話が見える(99/10/24『北京晩報』, 99/11/26『人民日報』等)。話題は主にメダルの獲得数であるが、アメリカ、ロシアの2強を追うドイツ、フランス、イタリア、韓国、キューバ、オーストラリアそして中国という第2グループがどこまで

善戦できるか、女子跳び込み、女子重量挙げ、卓球、バドミントン、男子体操等では確実に金メダルを、といった内容である。袁偉民氏は、高い目標を掲げることは厳しい練習に取り組む選手を激励し自信をつけさせるものである、と述べている。また、シドニー五輪で優秀な成績をあげることは、社会にも良好な精神的気風をもたらし、祖国のために最大の栄誉を勝ち取ることになる、と声を大きくして呼びかけている。

金メダルに期待がかかる競技の中にバレーボールの名が見えないことに示されるごとく、現在アジアのバレーボールは世界のトップレベルにはない。しかし中国においてバレーボールは以上にあげた記事からもわかるように、厳しい現状を見据えた上で独自の特長を築き、活路を切り開いていこうとしている。また、2000年1月8日に開幕する中国甲Aリーグ(国内1部リーグ)には昨年に引き続き「維達」という企業がスポンサーに付き、各チームはプロ化という改革が進む一方、中国ではやはり国家的、国民的精神論に結びつくところでのスポーツという面も存在している。このような背景が生み出す一種独特のスポーツに対する真摯さと意味づけは、'98世界選手権大会の報道の際も見られたものであるが、これも中国の選手とスポーツ界の1つの支えとなっているのではないかと思われる。

シドニー五輪の出場権をかけて中国と日本は男女ともいよいよ熾烈な最終決戦に入る。予選そして五輪と、中国、アジア、そして世界のバレーボールが21世紀にいかなる発展を見せるのか、今後も注目していきたい。

- 1) 矢島忠明, 河野貴美子: 活字メディアが伝える中国バレーボール~'98世界選手権の報道から~, バレーボール研究, 創刊号: pp. 63-68, 1999.